

ノビル



コヒルガオ



カントウヨメナ



イヌゴマ



ツククサ



ミゾソバ



ヤブマメ

さいたま市水生生物

～ 植物 ～

さいたま市 環境局 環境共生部 環境対策課

目次

- さいたま市水生生物調査とは
- 調査地の概要（令和4年度調査）
- 調査内容【植物】（令和4年度調査）
- 植物の生態
- 植物【確認種】（令和4年度調査）
- 植物【重要種】（令和4年度調査）
- 植物【外来種】（令和4年度調査）
- 水生植物の生態
- 水生植物【確認種】
- 経年比較【確認種】
- 経年比較【重要種】
- 経年比較【外来種】
- 経年比較【地点別】
- まとめ・考察



河道内の木杭に生育する草花（境橋）

さいたま市水生生物調査とは

- さいたま市では『さいたま水と生きものプラン』などの枠組みの中で、市内の水環境を把握する目的の一環として、河川の生物を把握するために水生生物調査を実施しています。
- 水生生物調査は、平成17年度～22年度は魚類と底生動物を併せて実施していました。
- 平成23年度以降は、魚類、底生動物、植物の3項目について、3年で一巡するように各項目3年に一度調査しています。
- なお、水質調査については、毎年、実施しています。
- 水生生物調査は開始されてから10年以上が経過し、調査結果も蓄積されてきたため、項目別にデータを公開いたします。
- 今回は植物について報告します。

■経年の調査時期・調査項目

業 務 名	調査年度	調査地点				調査時期	調査項目						
		妙見橋	城北大橋	境橋	堀の内橋		魚類	底生動物	植物	その他の項目（水質等）			
										気温 水温 透視度 pH DO 流量	BOD EC	流向 色相 臭気	COD SS
水生生物調査	H17	○	○	○	○	夏・秋	○	○		○	○		
さいたま市 水生生物調査	H18	○	○	○	○	夏・秋	○	○		○	○		○
	H19	○	○	○	○	夏・秋	○	○		○	○	○	○
	H20	○	○	○	○	夏・秋	○	○		○	○	○	○
	H21	○	○	○	○	夏・秋	○	○		○	○	○	○
	H22	○	○	○	○	夏・秋	○	○		○	○	○	○
	H23	○	○	○	○	夏・秋	○			○	○	○	
	H24	○	○	○	○	夏・初春		○		○	○	○	
	H25	○	○	○	○	初夏・秋			○	○	○	○	
	H26	○	○	○	○	夏・秋	○			○	○	○	
	H27	○	○	○	○	夏・初春		○		○	○	○	
	H28	○	○	○	○	初夏・秋			○	○	○	○	
	H29	○	○	○	○	夏・秋	○			○	○	○	
	H30	○	○	○	○	夏・初春		○		○	○	○	
	R元	○	○	○	○	初夏・秋			○	○	○	○	
	R2	○	○	○	○	夏・秋	○			○	○	○	
	R3	○	○	○	○	夏・冬		○		○	○	○	
R4	○	○	○	○	初夏・秋			○	○	○	○		

調査地の概要 (令和4年度調査)



No.1 妙見橋 (綾瀬川)
河口まで約40km

本地点は綾瀬川にかかる妙見橋に位置する。



No.2 城北大橋 (元荒川)
河口まで約51km

本地点は元荒川にかかる城北大橋に位置する。



No.4 堀の内橋 (鴨川)
河口まで約45km

本地点は鴨川にかかる堀の内橋に位置する。



No.3 境橋 (芝川)
河口まで約44km

本地点は芝川にかかる境橋に位置する。
本年度は橋の改修工事が実施されました。



橋の改修前



橋の改修に伴いワンド的な環境が形成された。

橋の改修中

調査内容【植物】（令和4年度調査）

■ 調査時期・回数

2回(初夏・秋季)

・ 初夏(かんがい期)

2022年6月

・ 秋季(非かんがい期)

2022年10月

■ 調査方法

植物相（任意踏査）



■ 重要種の選定基準

No.	法律及び資料名	公布及び発行（公表）
1	文化財保護法	昭和25年5月30日公布 法律第214号
2	絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律	平成4年6月5日公布 法律第75号
3	環境省レッドリスト2020（植物Ⅰ（維管束植物））	環境省 2020年3月27日公表
4	埼玉県レッドデータブック2011 植物編	埼玉県 2012年3月発行

注) 重要種カテゴリー

- 1: 「文化財保護法」
- 2: 「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」
- 3: 「環境省レッドリスト2020（植物Ⅰ(維管束植物)）」
絶滅（EX） 野生絶滅（EW） 絶滅危惧ⅠA類（CR） 絶滅危惧ⅠB類（EN） 絶滅危惧Ⅱ類（VU）
準絶滅危惧（NT） 情報不足（DD） 地域個体群（LP）
- 4: 「埼玉県レッドデータブック2011 植物編」
絶滅（EX） 野生絶滅（EW） 絶滅危惧ⅠA類（CR） 絶滅危惧ⅠB類（EN） 絶滅危惧Ⅱ類（VU）
準絶滅危惧（NT） 情報不足（DD） 絶滅のおそれのある地域個体群（LP）

■ 外来種の選定基準

No.	法律及び資料名	公布及び発行（公表）
1	特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律	平成16年6月2日公布 法律第78号
2	我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（生態系被害防止外来種リスト）	環境省 2015年3月26日公表
3	外来種ハンドブック	日本生態学会編 2002年9月発行

植物の生態

本調査での植物は、維管束と呼ばれる水分や養分を運ぶ通路を持っている維管束植物をさします。調査地でみられる代表的な植物の生態を紹介します。

■ シダ植物

孢子による繁殖
= 種子をつくらない植物

■ 裸子植物

胚珠が子房につつまれていない植物。

■ 双子葉植物(離弁花)

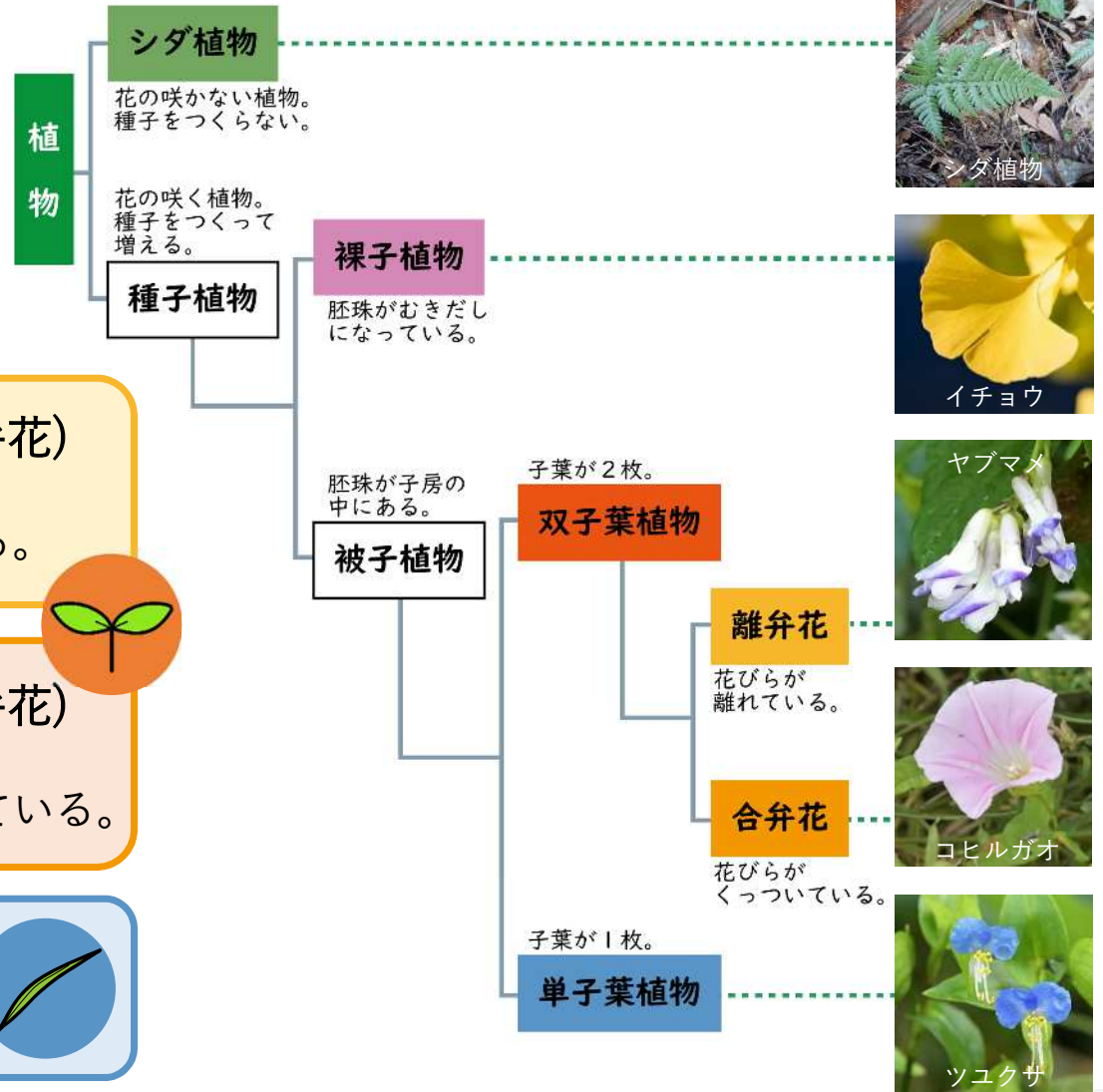
子葉が2枚の植物。
花びらが離れている。

■ 双子葉植物(合弁花)

子葉が2枚の植物。
花びらがくっついている。

■ 単子葉植物

子葉が1枚の植物。

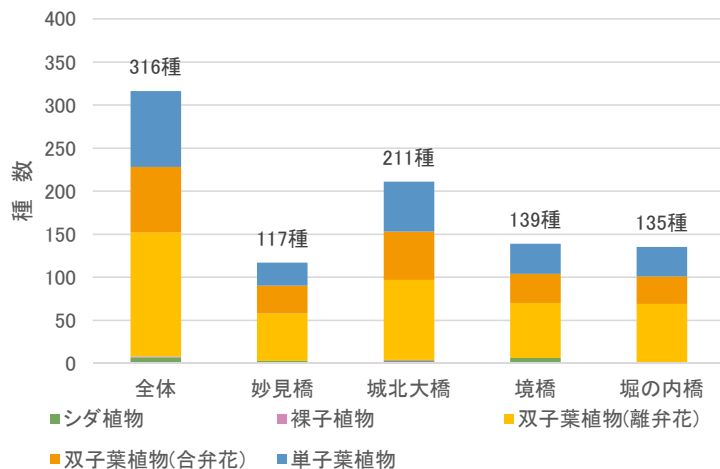


出典：モニタリングサイト1000 陸水域調査 湖沼：水生植物調査マニュアル 第2版

植物【確認種】 (令和4年度調査)

- 植物は、全調査地点で79科316種が確認されました。
- 確認種数は樹林環境を有する城北大橋で最も多く211種と、他の3地点に比べて突出して多く確認されました。
- シダ植物は7種、裸子植物はイチヨウの1種と確認種数は少ないです。
- 反対に、双子葉植物と単子葉植物が、全体の97%以上を占めています。

■ 地点別の確認種数



■ 双子葉植物(離弁花)



クリ
ブナ科の落葉高木。山地に生え、葉は長楕円形で先がとがる。6月ごろ、黄白色のにおいの強い雄花の穂をつけ、その基部に雌花をつける。



イヌタデ
北海道から九州の沼地や川辺などの水辺に生育。蕎麦(ソバ)に似た草姿が名の由来。

■ 双子葉植物(合弁花)



イヌゴマ
湿地や田んぼ周辺に生える多年草。名は、黒ゴマ(胡麻)のような黒い種子ができるが食べる価値はない役に立たないものの意。



カントウヨメナ
水田のあぜや耕地周辺などやや湿ったところに普通に生える多年草。主に関東地方に生えることが名の由来。

■ 単子葉植物



ノビル
ノビル(野蒜)はユリ科ネギ属の多年草で、全国の野原、河原の土手などに自生。生で酢味噌和えにするなど食す。



ウマスゲ 重要種
平野部の河川敷、湿地などに生育する多年草。実は5~7月に付ける。

植物【重要種】 (令和4年度調査)

- 重要種は11科14種が確認されました。
- 種数は城北大橋が最多で9種、次いで境橋の4種、他の2地区は1種でした。
- 城北大橋は樹林を有し河川環境が複雑なため多くの種が確認されました。
- 境橋は橋の付替え工事に伴い新たに造成された水辺環境で確認されました。

■ 地点別の確認種

No.	科名	種名	妙見橋	城北大橋	境橋	堀の内橋	重要種の選定基準			
							1	2	3	4
1	ホウライシダ科	ヒメミズワラビ			●					NT
2	タデ科	シロバナサクラタデ		●						NT
3		コギシギシ		●				VU	VU	
4	マツモ科	マツモ		●						VU
5	アブラナ科	コイヌガラシ		●					NT	NT
6	ユキノシタ科	タコノアシ			●				NT	VU
7	ウリ科	ゴキヅル	●	●						VU
8	サクラソウ科	ヌマトラノオ		●						NT
9	シソ科	ミゾコウジュ				●			NT	NT
10	キク科	タウコギ			●					NT
11	ヒルムシロ科	エビモ		●						NT
12		ササバモ		●						NT
13	カヤツリグサ科	ウマスゲ		●						NT
14		カンエンガヤツリ			●				VU	VU
計	11科	14種	1種	9種	4種	1種	0種	0種	5種	14種

注) 重要種の選定基準及びカテゴリの詳細はp.5を参照。



タコノアシ

水田や農業水路、湿地帯などの流れのない泥底に生息する。雑食性である。国内では、遺伝的に異なる複数の集団が確認されている。



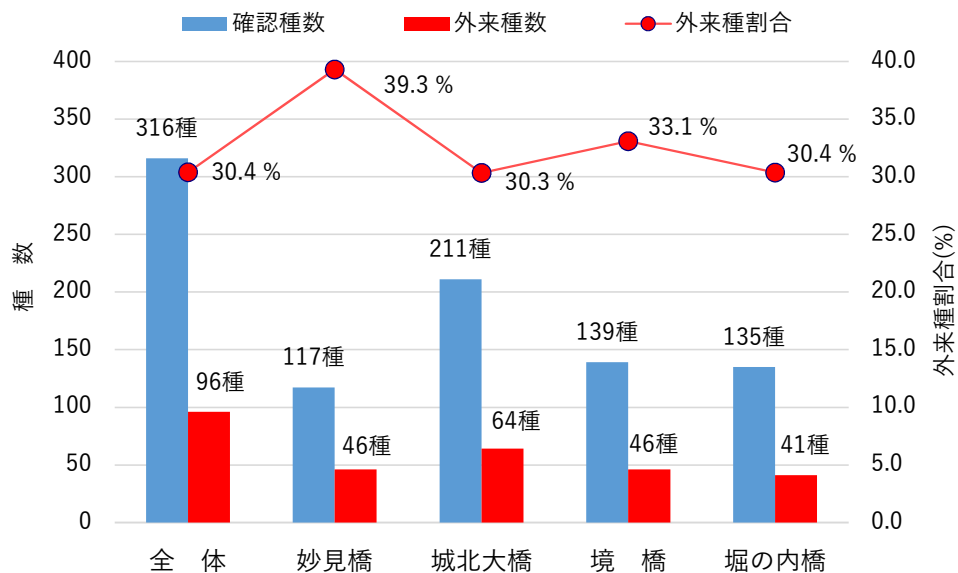
ミゾコウジュ

日本全国、沿岸部から河川上流部まで広く分布する。食文化において重要な種であるが、乱獲や生息環境の減少により、個体数を減らしている。

植物【外来種】 (令和4年度調査)

- 確認種全体の約3割が外来種です。
- 外来種は、人的影響の強い環境や攪乱が多い環境ほど侵入しやすく、樹林や山地など従来の自然が維持されている環境には侵入し難い傾向があります。
- 妙見橋は周囲を住宅や道路などの人工構造物に囲まれているため、外来種の割合が4割と高くなりました。

■ 調査地点別外来種割合



■ 特定外来生物の確認状況

No.	科名	種名	妙見橋	城北大橋	境橋	堀の内橋
1	ウリ	アレチウリ	●	●	●	●
2	ゴマノハグサ	オオカワヂシャ			●	
3	キク	オオキンケイギク		●		
計	3科	3種	1種	2種	2種	1種

注) 外来種カテゴリー
 「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」
 特定：特定外来生物



日当たりの良い、腐植質の多い沖積地を好む。河川敷などの在来種への負の影響が大。



水路、河川、湿地の水際などの環境に分布する。問題は在来種との競合、遺伝的攪乱等。



路傍、河川敷、線路際などの荒地に環境に分布する。問題は在来種と競合。



路傍や畦道等にみられ、日本に入ったのは明治初年と推定。



飼料や緑肥として栽培していたものが野生化。



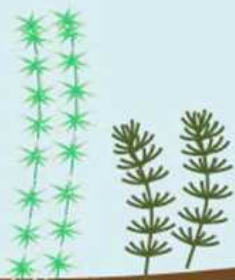
全国的に広がり、ススキ、ヨシ等の在来種と競合で問題。

水生植物の生態

河川環境には水生植物が生育しています。
水生植物には色々な種類があり、調査地でみられる代表的な種類の生態を紹介します。

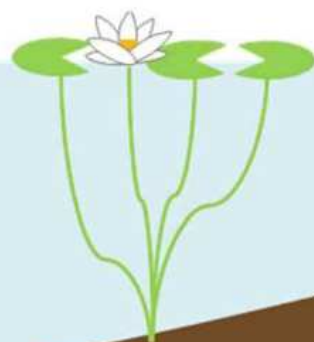
■ 沈水植物

水底に根があり、葉が水面下にあるもの。



■ 浮葉植物

水底に根があり、葉を水面に浮かべているもの。



■ 浮遊（浮標）植物

水底に根はつかず、茎や葉を水面に浮かべているもの。



■ 抽水植物

茎の下部が水面下にあるもの。



出典：モニタリングサイト1000 陸水域調査 湖沼：水生植物調査マニュアル 第2版
環境省自然環境局生物多様性センター2017年3月

水生植物【確認種】

- 抽水植物は、ヨシやガマ、マコモなどの大型イネ科植物が確認されています。これらの種は、自然堤防の役割を果たす場合があります。
- 浮遊（浮標）植物は、ホテイアオイやウキクサなどが確認されています。上流から流されてきており、流れの弱い水際の草の間などでみられます。
- 浮葉植物と沈水植物は本来地面に根を張る植物ですが、今回確認された個体は根が切れており、浮遊（浮標）植物と同様に、上流から流された個体です。
- 本調査地で確認される水生植物は抽水植物を除いて、上流から流されてきた個体が多く、残念ながら定着はしていません。
- ただし、本調査地の上流には水生植物が生育できる環境が維持されていることが推察できます。

■ 抽水植物



全国の沼地、ため池、河川、水路から湿原まで、いたるところの水域や湿地に最もふつうに生育する抽水～湿生植物。ヨシは生育環境により大きな変異を示す。



ヨシの根は太く、地中深く横に伸び土壌の流出や地形崩壊を防ぐことから自然堤防の役割を果たす。

■ 浮遊（浮標）植物



ホテイアオイ：各地に野生化し、水面を覆うほどの群落をつくるやっかいな害草。
ウキクサ：水田や池などに普通に見られ、花はめったに見られない。

■ 浮葉植物



「菱形」という語はこのヒシの葉の形が由来。池や沼に群生する1年草。

■ 沈水植物



全国の沼地、ため池、河川、水路などさまざまな水域に生育する沈水植物。流水域では最も普通の種で水質汚濁にも強い。

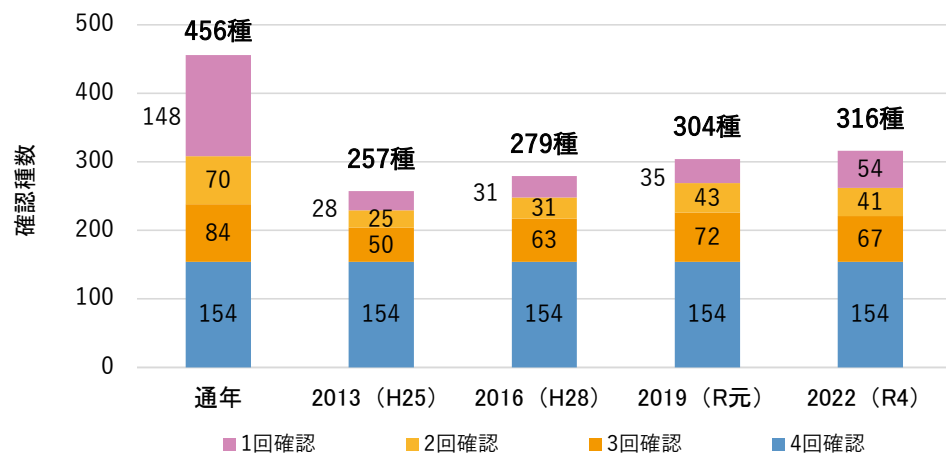


北海道(稀)、本州、四国、九州の湖沼、河川、水路などに群生する沈水～浮葉植物。水が引くと陸生形を形成してよく生育する。

経年比較【確認種】

- 確認種は、過去4回の調査で年々増加し、通年では456種が確認されました。
- 全4回の調査で毎回確認された種は、154種と全体の約3割強でした。
- 全調査で1回しか確認されなかった種は、通年では148種とこちらも全体の約3割でした。
- 河川環境には定着している種がある一方で、灌漑による水位変動や台風による増水などの攪乱が多いため、毎年、ある一定数の植物は変わっています。

■ 経年の確認種数



■ 全調査年度で確認された代表的な種



カナムグラ
日あたりの良い乾燥した荒地に普通に生えるつる草。花粉をまき散らす風媒花で、オオブタクサなどとともに秋の花粉症の主要な原因植物となっている。



ミゾソバ
別名ウシノヒタイ。別名は葉の形が牛の顔(額)を思わせることによる。田のあぜや水辺など、やや湿ったところに群生する高さ0.3~1mの一年草。



アカメヤナギ
平野部を流れる大きな川沿いに普通に見られる。新葉が赤いことから赤芽柳の名がある。



セイバンモロコシ
地中海沿岸原産の高さ0.8~1.8mの多年草。戦後、全国に急速に広がり、地中に長い根茎をのばすので、やっかいな雑草として嫌われている。

経年比較【重要種】

- 現在までに確認された重要種は14科18種でした。
- 平成25年度から現在まで継続して確認された重要種はシロバナサクラタデ、ゴキヅル、ヌマトラノオの3種でした。
- 1ヵ年のみ確認されている重要種はヒメミズワラビ、ホソバイヌタデ、コイヌガラシ、カワヂシャ、タウコギ、カンエンガヤツリの6種でした。
- 令和4年度は境橋の付替えによりジャカゴ環境が形成され、新しい重要種が確認されています。

■ 経年の重要種

No.	科名	種名	調査年度				重要種の選定基準			
			H23	H28	R元	R4	1	2	3	4
1	ホウライシダ	ヒメミズワラビ				●				NT
2	タデ	ホソバイヌタデ			●				NT	EN
3		シロバナサクラタデ	●	●	●	●				NT
4		コギシギシ		●	●	●			VU	VU
5	マツモ	マツモ			●	●				VU
6	アブラナ	コイヌガラシ				●			NT	NT
7	ユキノシタ	タコノアシ		●	●	●			NT	VU
8	ウリ	ゴキヅル	●	●	●	●				VU
9	ヒシ	ヒシ	●	●						NT
10	アリノトウグサ	フサモ属の一種		●	●					NT
11	サクラソウ	ヌマトラノオ	●	●	●	●				NT
12	シソ	ミゾコウジュ			●	●			NT	NT
13	ゴマノハグサ	カワヂシャ		●					NT	VU
14	キク	タウコギ				●				NT
15	ヒルムシロ	エビモ	●	●		●				NT
16		ササバモ		●	●	●				NT
17	カヤツリグサ	ウマスゲ		●	●	●				NT
18		カンエンガヤツリ				●			VU	VU
計	14科	18種	5種	11種	11種	14種	0種	0種	7種	18種

注) 重要種の選定基準及びカテゴリーの詳細はp.5を参照。



湿地に生える高さ0.5~1mの多年草。日本全土に分布する。



湿地に生える高さ40~70cmの多年草。本土、四国、九州に分布する。



埼玉県では1年草で水湿植物。東部、東北部を中心に見られる。野外では除草剤の使用などで減少し、絶滅危惧種となっている。東南アジアではサラダとして生食する。

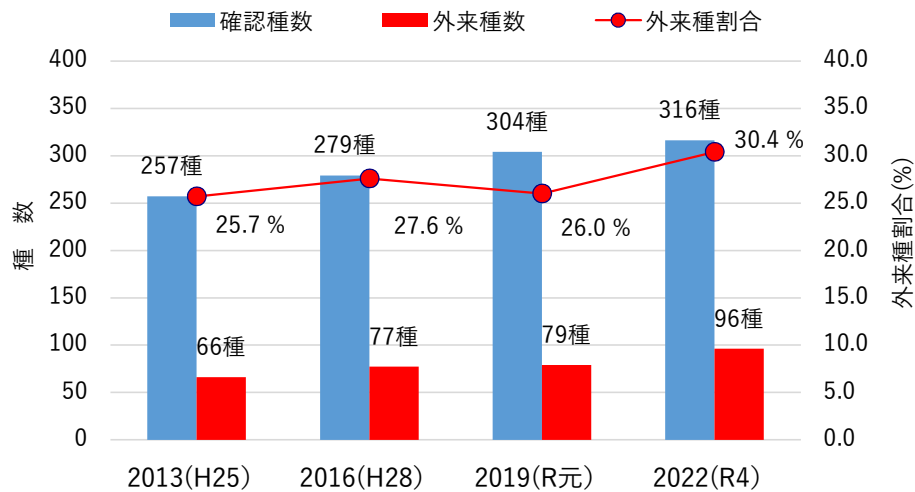


河川敷内の水湿地や水田わきに生育する。産地が限られ、個体数も少ないことから、僅かな環境変化で失われる可能性が高い。

経年比較【外来種】

- 外来種は平成25年以降、令和元年の外来種割合が微減したものの、概ね確認種数と外来種割合は共に増加傾向にあります。
- 外来種の中でも特に日本の生態系に負の影響を与える特定外来生物は、令和4年の確認種として紹介した3種（アレチウリ、オオカワヂシャ、オオキンケイギク）の他にオオフサモを追加した4種が確認されています。
- 令和4年にアレチニシキソウやクスダマツメクサなど新たな外来種が20種も追加されていることから、外来種の侵入が進んでいるものと推察されます。

■ 外来種の種数の経年比較



牧草として明治初期に渡来し、全国に野生化している多年草。ヨーロッパ原産。



夕化粧はマツヨイグサの別称。南アメリカ原産の多年草で、明治時代から栽培開始といわれる。



北アメリカ原産の1年草。昭和初期に渡来し、本州、四国、九州に帰化している。



ヨーロッパ、北アメリカ原産の寄生植物。関東地方や近畿地方などに帰化。マメ科を中心に、キク科やセリ科にも寄生する。



北アメリカ原産の1年草。1952年に静岡県の清水港で見つかり、現在では各地の河川敷などに広がっている。花粉症の一因である。



路傍の空き地や河川敷などに生える多年草。分枝して枝を広げ高さ1mになる。1600年ごろに渡来し、庭で栽培されてきたが、野生化。

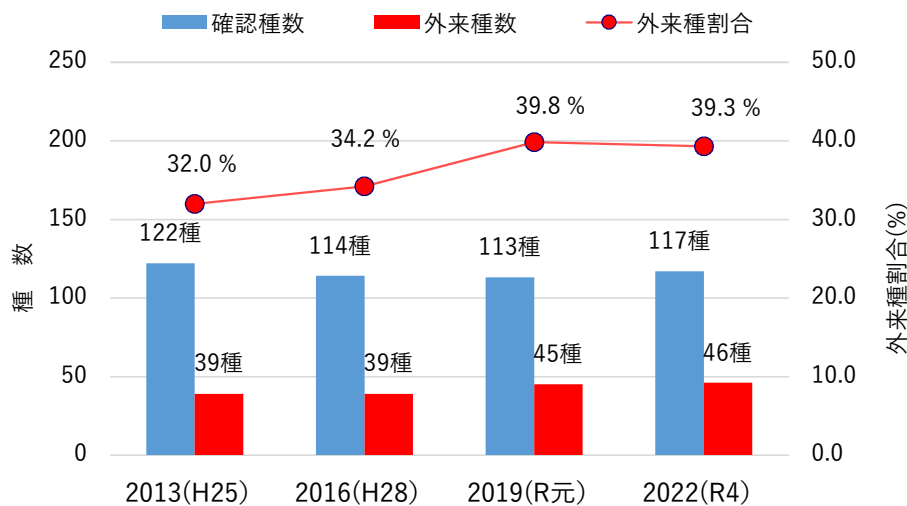
■ 特定外来生物の経年比較

科名	種名	2013(H25)	2016(H28)	2019(R元)	2022(R4)
ウリ	アレチウリ	●	●	●	●
ゴマノハグサ	オオカワヂシャ	●	●		●
アリノトウグサ	オオフサモ	●	●	●	
キク	オオキンケイギク		●		●
4科	4種	3種	4種	2種	3種

経年比較【地点別】（妙見橋）

- 確認種は115種前後と大きな変動はありませんでした。
- ただし、単調な河川環境のため他の調査地点に比べ確認種が少ない地点です。
- 重要種は平成28年がタコノアシ、ゴキヅル、カワヂシャの3種と最多で、令和元年はタコノアシ、令和4年はカワヂシャと1種ずつに減少しています。
- 外来種は令和元年に39種から45種に増加して約4割が外来種となっています。

■経年の確認種数



■重要種の確認状況

注) 重要種のカテゴリーの詳細はp.5を参照。

科名	種名	H25	H28	R元	R4	環境省RL	埼玉県RDB2011
ユキノシタ	タコノアシ		●	●		NT	VU
ウリ	ゴキヅル		●		●		VU
ゴマノハグサ	カワヂシャ		●			NT	VU
3科	3種	0種	3種	1種	1種	2種	3種



花や実がびっしり並んだ花序を、吸盤の多いタコの足に見立てたものという。湿地や沼、休耕田に生える多年草。



果実が熟すと横に割れ、上半部がかぶせぶたの容器のふたのようにとれることによる。水辺に生える一年生のつる草。



川べりに生えるチシャ（レタス）という意味でつけられた。若葉は食べられる。湿ったところに生える高さ10～50cmの2年草。

■外来種の確認状況



ヨーロッパ原産の1年草で、野原や荒地、河原などに生える。



茎の上部の節の下から粘液を出し、ここに虫がくっつくことによる。ヨーロッパ原産の1～2年草で、日本には江戸時代に渡来した。

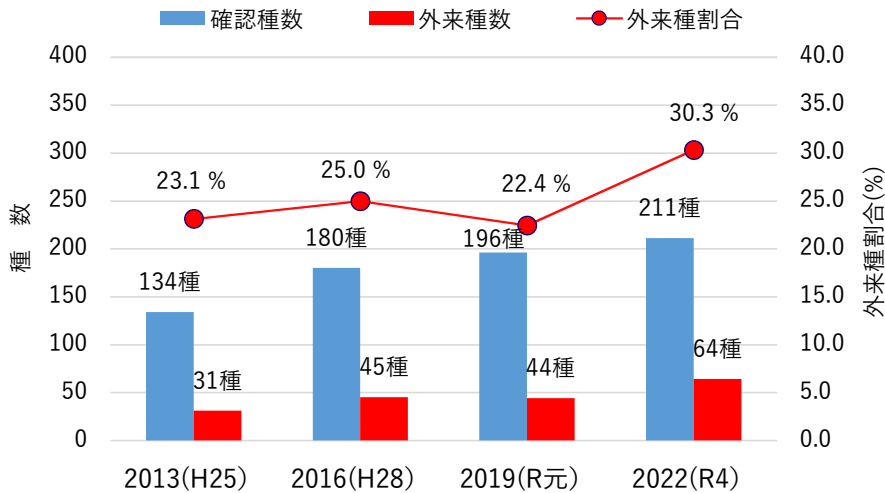


食用にならず、カラスが食べる麦の意味。ヨーロッパ西アジア原産の1～2年草。麦と一緒に古い時代に日本に入ったと考えられている。

経年比較【地点別】（城北大橋）

- 確認種数は例年通り最も多く、令和4年は211種と過去最多の確認種数でした。
- 重要種も例年通り最も多く、平成25年を除くと例年9種が確認されています。
- 本調査地点が多様な植物相を形成しているのは、樹林環境が隣接し河道内に寄州がみられるなど多様な環境が形成されているため、豊かな植物相になったものと推測されます。

■経年の確認種数



■重要種の確認状況

注) 重要種のカテゴリーの詳細はp.5を参照。

科名	種名	H25	H28	R元	R4	環境省RL	埼玉県DB2011
タデ	ホソバイヌタデ			●		NT	EN
	シロバナサクラタデ	●	●	●	●		NT
	コギシギシ		●	●	●	VU	VU
マツモ	マツモ			●	●		VU
アブラナ	コイヌガラシ				●	NT	NT
ウリ	ゴキツル	●	●	●	●		VU
ヒシ	ヒシ	●	●				NT
アリノトウグサ	フサモ属の一種		●	●			NT
サクラソウ	ヌマトラノオ	●	●	●	●		NT
ヒルムシロ	エビモ	●	●		●		NT
	ササパモ		●	●	●		NT
カヤツリグサ	ウマスゲ		●	●	●		NT
9科	12種	5種	9種	9種	9種	4種	12種



多年草で半地中植物。埼玉県では低地に分布し、河川や荒地に生えるが少ない。



全国の湖沼、ため池、流れのゆるい河川や水路などに生育する多年性の沈水性浮遊植物。



果実が熟すと横に割れ、上半部がかぶせふたの容器のふたのようにとれることによる。水辺に生える1年性のつる草。



大型のスゲなのでつけられた。平地の水湿地に生える高さ40~60cmの多年草。

■外来種の確認状況



ヨーロッパ原産の多年草で、明治時代に渡来し、現在では日本全土の湿地に野生化している。



ヨーロッパから西アジア原産の高さ0.3~1.2mの多年草。日本には明治初期に輸入された。緑化にも広く利用され、各地に野生化している。

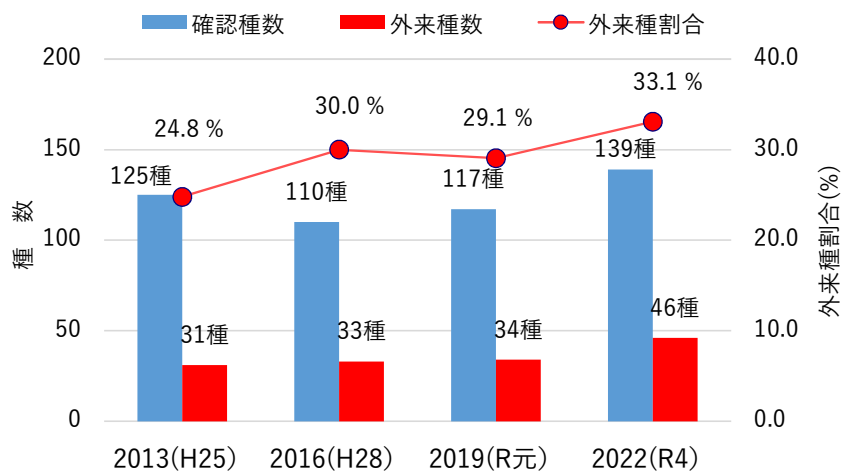


花の形を鏡に見立てたものという。ヨーロッパ原産で、江戸時代に渡来し、観賞用によく植えられているほか、野生化しているものもある。

経年比較【地点別】（境橋）

- 確認種は令和元年までは約120種と大きな変動はなかったものの、令和4年は139種に増加していました。
- 令和4年の重要種は4種と例年と比較して増加しており、他3地点を含めた場合においても初確認種が多くみられました。
- 外来種は令和元年までは30種前後と大きな変動はなかったものの、令和4年は46種に増加していました。
- これらの変化は、令和4年に境橋の付替え工事によりワンド環境が新たに形成され、新しい種が増加したものと考えられます。

■経年の確認種数



■重要種の確認状況

注) 重要種のカテゴリーの詳細はp.5を参照。

科名	種名	H25	H28	R元	R4	環境省RL	埼玉県RDB2011
ホウライシダ	ヒメミズワラビ				●		NT
ユキノシタ	タコノアシ			●	●	NT	VU
キク	タウコギ				●		NT
	カンエンガヤツリ				●	VU	VU
3科	4種	0種	0種	1種	4種	2種	4種



埼玉県では1年草で水湿植物。亜熱帯から暖温帯にかけての水田、水路、沼地などに生じ、暖地ほど多い。



花や実がびっしり並んだ花序を、吸盤の多いタコの足に見立てたものという。湿地や沼、休耕田に生える多年草。



水田に生え、葉の様子が樹木のウコギに似ていることからつけられた。



江戸時代末期の本草学者岩崎灌園の名にちなんだもの。岩崎灌園はその著「本草図譜」でカンエンガヤツリの図を初めて紹介した。

■外来種の確認状況



コセンダングサの変種で、世界の熱帯から暖帯に広く分布している。日本には幕末に渡来したといわれ、近年暖地を中心に急に多くなってきている。



熱帯アメリカ原産の1年草で、1882年に東京の小石川植物園で栽培されている。戦後各地で見いだされるようになったことから、現在の帰化種は輸入穀物に混じってきたものと思われる。

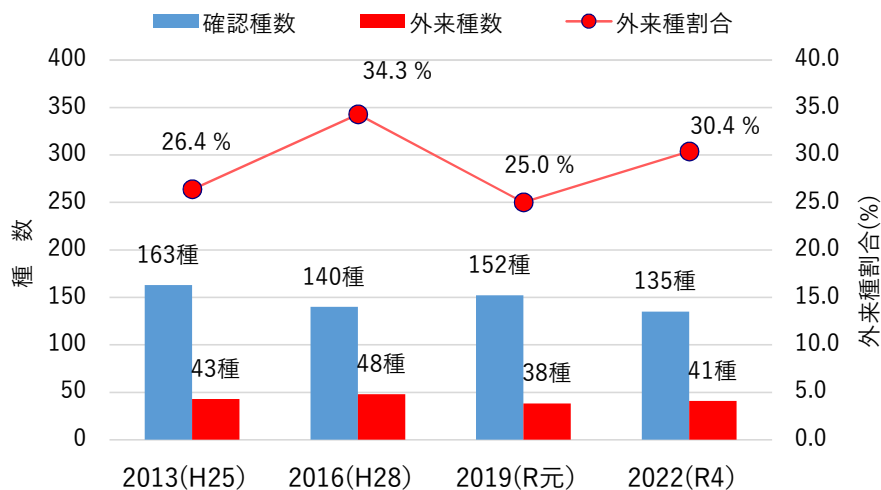


北アメリカ原産の1~2年草。明治維新のころ渡来し、現在では日本中に広がり、市街地や農村だけでなく、亜高山帯にまで入り込んでいる。

経年比較【地点別】（堀の内橋）

- 本地点は、河川管理の一環で実施されている草刈りの影響により、確認種数と外来種割合が各年で増減を繰り返しています。
- 他の地点より草刈りの影響を強く受けるのは、支川との合流部に草地が形成されているおり、その草地で多様な種が確認されているからです。
- 重要種は他の調査地点では確認されていないミゾコウジュが令和元年以降確認されています。

■ 経年の確認種数



■ 重要種の確認状況

注) 重要種のカテゴリーの詳細はp.5を参照。

科名	種名	H25	H28	R元	R4	環境省RL	埼玉県RDB2011
シソ	ミゾコウジュ			●	●	NT	NT
ゴマノハグサ	カワヂシャ		●			NT	VU
2科	2種	0種	1種	1種	1種	2種	2種



やや粘り気のあるところに生える高さ30～70mの2年草。



川べりに生えるチシャ（レタス）という意味でつけられた。若葉は食べられる。湿ったところに生える高さ10～50cmの2年草。

■ 外来種の確認状況



北アメリカ原産の多年草。観賞用に栽培されていたものが野生化し、戦後急速に全国に広がった。



初夏から秋にかけて白い花を咲かせる南米原産の球根植物。日本への渡来は明治時代初期。



北アメリカ原産の2年草で、明治中期に渡来した。各地の道ばたなどに普通に生え、高さ20～50cmになる。

まとめ・考察

- 最も多くの種が確認されている城北大橋には、樹林や寄州など多様な河川環境が維持されています。
- 確認種数の少ない妙見橋には、両岸が護岸されており、単調な環境となっています。
- 多様な環境が混在する場所は、各環境に適した多様な生物の生息を可能とし、生物の多様性を高めます。
- 植物相は、境橋で工事に伴い造成された環境により確認種数が増加したものの、今後も変動する可能性が高いため追跡調査は必要です。
- 他の3地点の植物相には大きな変動はなく、概ね安定した状況にあると言えます。
- 重要種は、種構成に大きな変化がないため、調査地内の重要種の生育環境は維持されているものと推察されます。
- 外来種は、調査を開始した平成25年に比べ、増加傾向にあり、在来種への影響も懸念されます。
- 生物多様性を保全することは、私たちの豊かな生活を保全することに繋がります。



樹林と寄州など多様な河川環境（元荒川）



橋の付替え工事に伴い造成された環境（境橋）



単調な河川環境（妙見橋）



水位が低下した状況（堀の内橋）